

**The Buddhist Ordination Ritual during the Old Tibetan Empire  
as Described by Dunhuang Tibetan Documents**

〈in Japanese〉

**Kazushi Iwao**

Associate Professor, Faculty of Letters, Department of History,  
Ryukoku University

**Abstract**

Dunhuang and its adjacent areas were under the rule of the Old Tibetan Empire for approximately sixty years since the latter half of the 8<sup>th</sup> century. During this period, the expansion of cultural and interpersonal exchanges occurred in the Hexi area including Dunhuang and the Tibetan plateau through the spread of Buddhism. It is highly possible that Buddhism came into Tibet through the Dunhuang area. To understand an aspect of these interpersonal exchanges, this paper analyses Dunhuang manuscripts such as P.t.1000, 1001, 1002, S.10828, BD13212, IOL Tib J 1233. These documents are supposed to concern an ordination ritual that originated with Tibetan Buddhism.

The investigation yields the following conclusions: first, the Tibetan term *g'yar ston* is a key term for the understanding of these texts but it has thus far been translated in varied ways in previous studies although in fact, it should be interpreted as 'recite;'; second, the ritual was hosted by Tibetan monks and those who participated in the ritual were categorized by the number of stanzas of the Buddhist sutra that they could recite; third, those who participated in the ritual were Dunhuang Chinese inhabitants who had taken Buddhist names; and fourth, the Buddhist sutra and the number of stanzas that the initiates could recite were secretly recorded. This paper also elucidates that this ritual is similar to the rehabilitation process recorded in *Fanwang jing* (梵網經) and *Pusa Dichi jing* (菩薩地持經).

**要 旨**

敦煌とその周辺地域は8世紀後半に古代チベット帝国(吐蕃)の支配に入り、それ以来約60年間チベットの支配下にあった。この間、敦煌を含む河西回廊地域とチベット本土では、仏教を通じた交流が盛んに行われた。そのような交流においてチベットで行われた仏教が敦煌地域に流入した可能性は十分にある。この可能性を検証するために、本稿では、チベットの仏教に由来する授戒の儀式に関連すると考えられる一連の敦煌出土チベット語文書P.t.1000、1001、1002、S.10828、BD13212、IOL Tib J 1233の内容を分析した。

その結果、リストの内容を理解する鍵である *g'yar ston* が「念誦する」と解釈すべきであることを明らかにした上で、この儀式がチベット人によって主催されていたこと、念誦した頌数によってカテゴリが分けられていたこと、念誦である参加する人々は法名をもった敦煌の漢人であったこと、彼らの念誦した經典名と頌数は秘密に記録されたことを確認した。また、この儀式が『梵網經』や『菩薩地持經』の出罪法と類似する部分があることを指摘した。

# 敦煌チベット語文書にみえる 古代チベット帝国治下の授戒儀式<sup>(1)</sup>

岩尾 一史

キーワード：授戒儀式、敦煌文書、古代チベット帝国、念誦、チベット仏教

## はじめに

敦煌とその周辺地域は遅くとも 8 世紀後半に古代チベット帝国(吐蕃)の支配に入り、それ以来 9 世紀半ばまでチベットの支配下にあった。この間、敦煌を含む河西回廊地域とチベット本土では、仏教を通じた交流が盛んに行われたことが判明している<sup>(2)</sup>。

そのような交流においてチベットで行われた仏教が敦煌地域に流入した可能性は十分にある。本稿にて扱うのも、チベットの仏教儀式に関する一連の敦煌出土チベット語文書<sup>(3)</sup>P.t.1000、1001、1002、S.10828、BD13212、IOL Tib J 1233 である。後述する通り、これらの文書はチベットの授戒に関するものであると指摘されてきた。本稿では先行研究の成果をふまえた上で、これら文書の内容分析を進めたい。

## I. 授戒に関する敦煌チベット語文書

まずは授戒に関する敦煌出土のチベット語文書の研究史について確認しておこう。一連の文書群の中で最も早くにその存在が知られたのは、P.t.1000、1001、1002 であり、はじめに Marcelle Lalou の『敦煌チベット語文書目録』にて紹介された<sup>(4)</sup>。Lalou は P.t.1000

<sup>(1)</sup> 本稿は龍谷大学世界仏教文化研究センター国際シンポジウム「チベットの宗教文化と梵文写本研究」(2017年12月2日)における研究発表の一部を大幅に加筆したものである。シンポジウムの席上ならびにその後も多くの先生からご意見を賜ったが、特に桂紹隆先生(龍谷大学世界仏教文化研究センター研究フェロー)ならびに能仁正顕先生(龍谷大学世界仏教文化研究センター長)にはシュローカと頌につき詳細なご教示を賜った。記して深謝したい。ただし言うまでもなく本稿に残る過誤は全て筆者の責任による。

<sup>(2)</sup> 例えば上山大峻『増補 敦煌佛教の研究』(法蔵館、2012年)を参照されたい。

<sup>(3)</sup> 本稿でのチベット語翻字は The ALA-LC Romanization Tables の規則に従うが、他に次のような記号を使用する。[abc] 文字が一部損傷している箇所。[...] 文字が読めない箇所。

<sup>(4)</sup> Lalou, Marcelle. *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang : conservés à la Bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)* (Paris : Librairie d'Amérique et d'Orient, 1939-61), vol. 2, 35.

と P.t.1001 をそれぞれ比丘、比丘尼が提供した仏教テキストのリスト<sup>(5)</sup>と紹介している。その後、山口瑞鳳氏が P.t.1001 に言及している。山口氏は「写経記録」として簡単に紹介するにとどまったが<sup>(6)</sup>、それでも他の研究者の注意を惹起したようで、沖本克己氏は敦煌の律文献を概観する中でこの文書に触れ、「写経目録」あるいは「講経リスト」であると説明している<sup>(7)</sup>。ただし山口・沖本両氏はテキスト全文を紹介する事は無く、一部分のみを訳出するにとどまっている。

この文書を本格的に研究したのは高田時雄氏である。高田氏はこのリストを戒律関係テキストの「捐献」の文書であると考え<sup>(8)</sup>、そして「捐献」されたテキストがすべて戒律に関係すること、また関係する別文書として P.t.1002 があることを指摘し、このリストはチベット支配期敦煌で行われた受戒儀式に関係するに違いない、と結論づけた<sup>(9)</sup>。

また筆者もこのリストを検討し、この類のリストが他にも存在すること (S.10828A・B、BD13212A・B、IOL Tib J 1233)、これら一連のリストが比丘と比丘尼、四波羅夷、八波羅夷など内容の相違はあるものの、基本的には同じ形式を持つこと、そしてこのリストが経典の継承や口訣と関係していると結論づけた<sup>(10)</sup>。ただし紙幅の都合上、前稿ではリストに現れる独自の術語や構造について検討することができなかった。

授戒に関する敦煌チベット語文書の研究は以上のように進展してきた。これら先行研究の結果を踏まえつつ、本稿ではリストにまつわる若干の問題を考察するが、まずはこのリストがどのような特徴を持つのか、簡単に説明しておきたい。

行論の都合上、まず P.t.1002 を紹介しよう。当文書はすでに高田時雄氏により紹介・研究されており<sup>(11)</sup>、また筆者も一度取り上げたところではあるが<sup>(12)</sup>、一部修正をした上で再度ここに訳しておく。

(5) 前掲書, vol. 2, 35. “Etat de textes bouddhiques offerts par des *bhikṣu*” (P.t.1000) “Etat de textes bouddhiques offerts par des *bhikṣunī*” (P.t.1001).

(6) 山口瑞鳳「吐蕃支配時代」榎一雄(編)『講座敦煌 2 敦煌の歴史』(大東出版社、1980年) 230-231 頁。

(7) 沖本克己「律文献」山口瑞鳳(編)『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』(大東出版社、1985年) 409-410 頁。

(8) 高田時雄「吐蕃期敦煌有関受戒的藏文資料」『敦煌・民族・語言』(中華書局、2005年) 143 頁。

(9) 前掲書 146-146 頁。

(10) 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌—チベット帝国期と帝国崩壊後—」坂尻彰宏(編)『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(平成 25 年度~平成 27 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 成果報告書、大阪大学、2017年) 30-34 頁。

(11) 高田時雄「吐蕃期敦煌有関受戒的藏文資料」『敦煌・民族・語言』(中華書局、2005年) 144-145 頁。

(12) 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌—チベット帝国期と帝国崩壊後—」坂尻彰宏(編)『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(平成 25 年度~平成 27 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 成果報告書、大阪大学、2017年) 31 頁。

tha (?) 『戒本』を 600 頌、『稻竿經』を 120 頌、『梵網經菩薩戒品』を 257 頌、『維摩經』を 1790 頌、『思益經』を 2100 頌、『觀世音經』を 85 頌、『金剛經』を 300 頌、『密嚴經』を 720 頌。

亥年仲春月 9 日、カム (?) のリンクク<sup>(13)</sup>の僧であるナナム・ロドーワンポと、ニャン・タクダドクジェと住持僧トゥプテンが公務を終わらせ (? sug las lags na)<sup>(14)</sup>、  
【同月】20 日にシュルのセトン (「西桐」「西同」) において懺悔し、備忘録として記した。

(1) tha so sor thar pa'i mdo shu log drug brgya' dang // sa lu ljang pa shu log brgya' nyi shu dang // tshangs pa dra ba'i mdo las byang cub (2) sems dpa'i tshul khriims kyi le'u shu log nyis brgya drug cu rtsa bdun dang // dri ma myed par grags pa shu log stong bdun (3) brgya dgu bcu // tshangs pa khyed bas sems shu log nyis stong cig brgya dang / spyang ras gzigs gi le'u shu log (4) brgyad cu rtsa lnga // rdo rje gcod pa shu log sum brgya' dang // drug pos bkol pa shu log bdun brgya nyi shu dang / (5) phag gi lo'i dpyid sla 'bring po tshes dgu la khams 'ul gi ring lugs ban de sna nam blo gros dbang po dang / (6) myang stag dgra rdog rje dang / gzhi 'dzin ban de thub bstan sug las lags na tshes nyi shu la shul se tong du (7) gshags te rjel byang du bris pha' //

(P.t.1002、第 1-7 行)

はじめに 8 つの經典とシュローカ (shu log) の数が記され、そして亥年の仲春月 20 日にシュルのセトンに来て懺悔が行われ、その様子をメモしたと記す。なおそれに先立ち 9 日にナナム・ロドーワンポ一行が現れるが、彼らもこの懺悔に関係していることは間違いなからう。なおセトンとは「西桐」「西同」の音訳であり、現在の蘇干湖盆地にあたる<sup>(15)</sup>。

次に P.t.1000 と S.10828 の一部をみてみよう。両文書はいずれも各僧あるいは僧尼の名前から始まるリストになっており、リストの各条は次のようなパターンを有する。

<sup>(13)</sup> リンククは集団の中で代表委員的役割を果たす人々を指す。Cf. Uray, G., *The Title dbang po in Early Tibetan Records*, P. Daffinà (ed.), *Indo-Sino-Tibetica: Studi in Onore di Luciano Petech* (Bardi Editore, 1990), 420, fn. 8; Takeuchi Tsuguhito, *Old Tibetan Contracts from Central Asia* (Daizo shuppan, 1995), 51, fn. 5.

<sup>(14)</sup> sug las lags na の解釈は高田氏に拠る (高田時雄「吐蕃期敦煌有關受戒的藏文資料」『敦煌・民族・語言』中華書局、2005 年、144-145 頁)。

<sup>(15)</sup> 陸離「敦煌吐蕃文書中の“色通 (Se tong)”考」『敦煌研究』2012-2 (2012 年) 66-72 頁、森安孝夫「ウイグルと敦煌」『東西ウイグルと中央ユーラシア』(名古屋大学出版会、2015 年) 303 頁脚注 6。

比丘の龍讚でありニンツォム千戸部の鄧昇昇は、『戒本』を 600 頌、『維摩経』を 1790 頌、『観世音品』を 85 頌、合計で 2475 頌を g'yar ton した。四波羅夷を自ら管理して断ち切った。

dge slong lung tsan snying tshoms kyi sde / (11) ding shing shing // so sor thar pa'i mdo  
shu log drug brgya dang / dri ma myed par grags pa shu log stong bdun brgya (12) dgu bcu  
dang / spyan ras gzigs kyi le'u shu log brgyad cu rtsa lnga byung / ste bsdoms na shu log  
gnyis stong (13) bzhi brgya bdun cu lnga g'yar ton du 'tshald / phas pham ba bzhi rang  
gnyer tsam 'chad 'tshald /

(P.t.1000A、第 10-13 行)

比丘尼の普明 (pho meng)、ゴーサル千戸の段家の女メンメンは、『戒本』を【800】頌、『維摩経』の三分の二の1200頌、『梵網経菩薩戒品』267頌、『金剛経』300頌、『観世音品』を85頌、合計で、2652頌を念誦した。八波羅夷を自ら管理して断った。無分別三昧を瞑想して、ルン (経典の伝授) と口訣も簡潔に行った。

[. . .]d 'tshald // dge slong ma pho meng rgod sar gyi sde / dang za man man // so sor (7)  
[. . .] grags pa sum gnyis shu log stong nyis brgya dang / tshangs pa dra ba'i mdo las byang  
cub (8) [. . .] / du shu log nyis brgya drug cu rtsa bdun dang / rdo rje gcod pa shu log sum  
brgya dang / spyan ras gzigs (9) kyi le'u shu log brgyad cu rtsa lnga byung ste bsdoms na  
shu log nyis stong drug brgya lnga bcu rtsa gnyis g'yar ton du 'tshald / phas pam ba brgyad  
(10) rang gnyer tsam du 'tshald 'tshald // rnam par myi rtog pa'i bsam gtan / sgom ste lung  
dang man ngag kyang mdo tsam 'tshald //

(S.10828B 第 6-10 行)

P.t.1000、 S.10828 に登場する人物は、全てチベット支配下の敦煌に置かれた千戸部 (トンサル、ゴーサル、ニンツォム) に属する漢人である。そして引用した条によると彼らは全て g'yar ton を行ない、そして四波羅夷、あるいは八波羅夷を断ち切ることを宣言する。その上で g'yar ton した経典の師から弟子へのルンと口訣が行われたとある<sup>(16)</sup>。

すでに前稿で指摘した通り<sup>(17)</sup>、リストには他にもいくつかの興味深い特徴がある。前稿で述べたことを以下に簡単にまとめておこう。

- (1) 同じ形式のリストとしては、P.t.1000 A・B、P.t.1001A・B、S. 10828A・B、BD13212A・B、IOL Tib J 1233 が確認できる。これらは比丘と比丘尼などの相違

<sup>(16)</sup> ただし他の条では瞑想やルン・口訣の部分が省略されることが多い。

<sup>(17)</sup> 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌—チベット帝国期と帝国崩壊後—」坂尻彰宏 (編)『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(平成 25 年度~平成 27 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 成果報告書、大阪大学、2017 年) 30-34 頁。

- はあるものの、およそ同じ形式を持つ。P.t.1000 に合計 14 人の比丘、P.t.1001 には合計 17 人の比丘尼、S.10828 には合計 8 人の比丘尼を確認することができる。
- (2) これらリストのうち、大英図書館所蔵の IOL Tib J 1233 は、薄い紙を 2 枚貼り合わせている。透かして見ると 2 枚の紙いずれの内側にもリストが記されており、袋とじになっている。リストを作った後、その内容を保存する必要があったが、内容自体は秘密にするためにこのような方法がとられたと考えられる。P.t.1000、P.t.1001、BD13212<sup>(18)</sup>は現在 A、B の 2 部に分けて保存されているが、いずれの A、B もお互いに全く同じ形状をしている。このことは、この 3 文書も元々は IOL Tib J 1233 と同じく貼り合わされていたことを示唆する。そこで、儀式がある種の秘密性を有していたことが想定できる。
- (3) P.t.1002 の内容からは、その儀式はカム（ドの属州 *mdo gams* のことか？）から来たというチベット人僧たちが関わってセトン（蘇干盆地）という地で行われ、参加した漢人たちは明らかに敦煌の人々であったこと、またその儀式には經典を口授すべき師が参加していたことが想定できる。

上記の (1) に付け加えて、BD13212 には合計 14 人の比丘尼が登場することをここで指摘しておきたい。そうすると、形状の問題からテキストを読むことができない IOL Tib J 1233 を除くと、現時点で比丘 14 人 (P.t.1000)、比丘尼 39 人 (P.t.1001、S.10828、BD13212) のデータが存在することになる。

以下では、このリストについて次の 3 点を検討したい。まず第一には、リスト中の重要術語 *g'yar ton* の解釈について検討する。この語は各僧・尼が經典の頌数を数え上げた後に *g'yar ton du 'tshal* 「*g'yar ton* を (*lit.* として) 行った」と繰り返し現れており、本リストの内容を理解する上で最も重要な術語である。しかし現行の辞書には登録されておらず、先行研究では様々に解釈されてきた。そこでまずはこの術語について検討しておきたい。第二に、このリストに繰り返し現れる經典の頌数について検討する。第三に、このリストが作成されたときに行われた儀式について考察する。前稿では何らかの授戒儀式であろうという見通しのみを述べたが、本稿ではこの点についてもう少し検討を深めたい。

## II. リストの検討

### 1. *g'yar ton* の解釈

山口瑞鳳氏は同文書を扱った際、「チベット文献 P1000、1001 の写経記録には写経生

---

<sup>(18)</sup> BD13212B の裏面には大ぶりの漢字で「放光般若經第二秩」とある。元は A と B がチベット文字の面を内側にして貼り合わされていたから、一見したところでは厚手の白紙であったはずであり、その状態のまま件の經典を包む用紙として再利用されていたのであろう。Cf. 中国国家図書館 (編) 任継愈 (主編) 『国家図書館蔵敦煌遺書』(北京図書館出版社、2011 年) 第 112 冊、162-163 頁。

の出自として sTong sar、rGod sar、sNying thom の三部落名のみが見え、写経生はすべて僧と尼のみであり、写経の大部分は献上 g'yar thon 用で、一部が新設四ヶ寺の保存用として残された様子である」と述べた<sup>(19)</sup>。「新設四ヶ寺の保存用として残された」というのが具体的にどの箇所から導き足されたのか筆者には不明であることはさておき、g'yar ton の解釈については「献上 g'yar thon 用で」とあるから、g'yar ton を g'yar thon を読み換え、その上で g'yar thon を「献上」と解釈したのであろう。しかし、なぜこの語が「献上」と解釈できるのか、肝心の理由は述べられていない。

一方、沖本克己氏は、g'yar ton の ton を「“thon”ならば「念誦」の意味もあり、“g-yar”を敬語の接頭詞ととれぬか。あるいは、“g-yar”は“g-yar gyi gshi”「安居事」(Mvyut. 9102) と使うから、“ton”を“ston”ととって、「夏安居」と考えられぬか。」と述べた<sup>(20)</sup>。そのような語句解釈の上で、「【山口 (1980) のように】「献上」ととるならば写経目録」、「念誦」あるいは「夏安居」ととれば、講経リストとなる」とする<sup>(21)</sup>。

沖本氏が「thon ならば念誦の意味もあり」として ton を thon と読み換えるのは、おそらく先に引用した山口説を踏まえているのであろうが、thon に念誦の意味があるというのはおかしい。というのも、確かに'don pa「念誦する」の命令形は thon であるが<sup>(22)</sup>、文脈上問題の箇所には命令形がそぐわないからである。また ton を ston と読み替えて「夏安居」と考えるのも難しいであろう。ston は季節の意味こそあれ安居とは解釈できないし<sup>(23)</sup>、そもそも夏安居に当たる語 dbyar gnas は別に存在するのである<sup>(24)</sup>。

高田氏は上記の二人と全く異なる説を提示しており、g'yar を「顔 (敬語形)」、ton を gtong「与える」の変化形とみなした上で、g'yar ton を「捐献」と解釈している<sup>(25)</sup>。しかし一般的にチベット語は音節末尾の子音の n と ng を明確に区別するから、ton と gtong の交替は想定しにくいのではなかろうか。

以上のように、先行研究では g'yar ton を「献上」「念誦」「夏安居」「捐献」と解釈してきた。しかし私見によれば、先行研究の解釈にはいずれも問題があるようである。では、この語をどのように考えるべきか、以下に私見を述べよう。

まず g'yar の解釈である。確かに先行研究が述べる通り g'yar には「顔 (敬語形)」と

<sup>(19)</sup> 山口瑞鳳「吐蕃支配時代」榎一雄 (編) 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』 (大東出版社、1980 年) 230-231 頁。

<sup>(20)</sup> 沖本克己「律文献」山口瑞鳳 (編) 『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』 (大東出版社、1985 年) 418 頁注 38。

<sup>(21)</sup> 前掲書 409 頁。

<sup>(22)</sup> 張怡蓀『藏漢大辞典』 (民族出版社、1993 年) 1421 頁。

<sup>(23)</sup> 前掲書 1115 頁、ston ka 項。

<sup>(24)</sup> 前掲書 1953 頁。

<sup>(25)</sup> 高田時雄「吐蕃期敦煌有関受戒的藏文資料」『敦煌・民族・語言』 (中華書局、2005 年) 148-49 頁注 11。



いう意味がある。しかし同時に g'yar は kha、つまり「口」の敬語形でもある<sup>(26)</sup>。その上で現行の辞書には kha ton 「経懺」「日常諷誦的経文」という語が登録されているからことに注意したい<sup>(27)</sup>。kha ton の kha は明らかに「口」の意味であるから、もし g'yar が kha の敬語形であるとする、g'yar ton は単に kha ton を敬語形に変えただけということになる。さらに現行の辞書には動詞 don pa 「念誦する」の意味として kha ton byed pa “to repeat by heart”<sup>(28)</sup> 「念、念誦」<sup>(29)</sup>が挙げられている。そうすると、g'yar ton du 'tshal も同じように「念誦を行う」という意味でとることができるのである。

そうすると、このリストは各僧・僧尼がどれだけの経典を念誦することができたかの記録であったということになる。

## 2. 念誦する頌の数

次に、念誦する頌の数について考察したい。まず注意したいのは、S.10828A と BD13212B に現れる次のような一節である。

口頭の[...]を、3000頌以下2000頌以上行って、完全に理解した者は【以下の通り】。

(24) /:/ g'yar [-]om / shu log sum stong man chad nyis stong yan cad 'tsal te / rab du chud pa'  
(BD13212B, 第24行)

sgo [...] 'cha' 比丘尼の仏法を学ぶものが (?) ...頌以下3000頌以上行って完全に理解した者は【以下の通り】。

(1) /:/ sgo [...] 'cha' dg[e] sl[o]ng [ma] [...] ch[o]s sl[o]b pas / [...] (2) chad sum stong yan chad 'tshal te / rab du chud pa'//

(S.10828A, 第1-2行)

引用箇所はいずれもわざわざ朱字で記されており、リストの見出しの機能を持つことは明らかである。なお P.t.1001A の上端に 3 文字のみ朱字が残っており、それは「理解した者は」(chud pa') と解釈し得る。本来はこの箇所に見出しがあったのであろう。

S.10828A では、「...頌以下 3000 頌以上」とあるように文書の破損によって頌の上限がわからなくなっているが、BD13212B の第 24 行では「3000 頌以下 2000 頌以上」としてあることから類推すると、基本的に 1000 頌刻みでカテゴリがまとめられていると考えられるから、S.10828A は 4000 頌以下 3000 頌以上であったと想定できる。

<sup>(26)</sup> 張怡蓀『藏漢大辞典』（民族出版社、1993年）2617頁。

<sup>(27)</sup> 前掲書 194頁。

<sup>(28)</sup> Jäschke, Heinrich August, *A Tibetan-English Dictionary* (London, 1881), 281.

<sup>(29)</sup> 張怡蓀『藏漢大辞典』（民族出版社、1993年）1421頁。

他のリストには見出しが残っていないが、上の考察をもとに頌数カテゴリについて検討しておこう。

P.t.1000A・B、P.t.1001A・B、S.10828B の念誦された頌数をみると、P.t.1000A・B、P.t.10001B、S.10828B はいずれも 2000 頌台に収まっているから、3000 頌以下 2000 頌以上のリストに含まれるのであろう。

また BD13212A にて念誦した頌数が判明する比丘尼は 9 人であり、それぞれの頌数は以下の通りである<sup>(30)</sup>。

比丘尼の法名	頌数の合計
?	144[-]*
覺明 (kag meng)	3167
妙光 ('bye'u kwang)	3242
覺淨 (kag dzeng)	3157
悟性 ('go seng)	3143
靈照 (leng ce'u)	3512
金剛藏 (kim kang dzang)	3157
覺滿 (kag man)	3107
妙境 ('be'u keng)	317[-]*

表 1 : BD13212A における比丘尼の念誦した頌数

\* 1 の位が文書破損により不明

最初に現れる法名不明の比丘尼の頌数が 144[-]とあるのは、他の 8 人が 3000 頌台であることを踏まえると誤記と見なし得る。そうすると、BD13212A は 3000~4000 頌のカテゴリに属するであろう。

カテゴリの判断が難しいリストも 2 つ存在する。一つが P.t.1001A で、念誦した頌数が判明する 8 人中で 6 人が 1000 頌台、1 人が 709 頌、1 人が 967 頌<sup>(31)</sup>となっている。単にミスで 1000 頌以下の人々が紛れ込んでいたのか、それとも 2000 頌以下のカテゴリは下限が決まっていなかったのか、今のところ判断がつかない。

もう一つが BD13212B の第 1~23 行で、表 2 の通りかなりのばらつきが確認される。

<sup>(30)</sup> 中国国家図書館 (編) 任繼愈 (主編) 『国家図書館蔵敦煌遺書』 (北京図書館出版社、2011 年) 第 112 冊 162 頁。

<sup>(31)</sup> 文書中には合計 967 頌と記されるが、実際の頌数を合計すると 2057 頌になる (P.t.1001、第 10-13 行)。

比丘尼の法名	頌数の合計
堅法 (kyan phab)	3338
了真 (le'u can)	382
妙能 ('bye'u nang)	1970
福嚴 (phug 'gem)	1978

表 2 : BD13212B (第 1-23 行) における比丘尼の念誦した頌数

このばらつきが何の理由によるものか、現時点ではっきりしたことはわからないが、第 24 行以降が 2000～3000 頌ということを考え併せるならば、その前段は元々 2000 頌以下のカテゴリであり、堅法の頌数が誤記という可能性はあるだろう。それにしても了真の頌数が 382 頌と格段に少ないが、2000 頌以下のカテゴリは下限が決まっていなかったのか、あるいは単に誤記なのか、やはり現時点では判断できない。

以上の検討の結果を表 3 としてまとめておく。

文書番号	比丘/比丘尼	頌数カテゴリ
P.t.1000A	比丘	2000～3000
P.t.1000B	比丘	2000～3000
P.t.1001A	比丘尼	2000 以下
P.t.1001B	比丘尼	2000～3000
S.10828A	比丘尼	3000～4000
S.10828B	比丘尼	2000～3000
BD13212A	比丘尼	3000～4000
BD13212B (第 1-23 行)	比丘尼	2000 以下
BD13212B (第 24 行)	比丘尼	2000～3000

表 3 : 各文書の頌数カテゴリ

さて、念誦する頌数によりカテゴリが分けられる理由であるが、残念ながら現存するテキストからはその意味を探ることはできない。というのも、多少の字句の異同はあるものの、どの頌数であろうと各条の末尾は基本的に共通しており、波羅夷を管理して断ち切り、また瞑想してルン・口訣を行った、と述べるのみなのである。頌数の多少が意味するところを理解するためには、他の儀式との比較研究が必要であろう。現時点において筆者は本儀式と一致するような例を見つけ出すには至っていないが、次に本儀式を理解する上で参考になり得る出罪法について言及しておきたい。

### 3. 出罪法との関係

前稿では「P.t.1000-1002、S. 10828、BD13212、IOL Tib J 1233 は、チベット僧たちが敦煌漢人たちに施したチベット独自の授戒儀式のリストとみられる」と結論付けた<sup>(32)</sup>。この点についてももう少し検討してみよう。

リストによると、参加した比丘・比丘尼たちは種々の経典の一定数の頌数を念誦し、そして四波羅夷、八波羅夷を「自ら管理して断ち切り」、あるいは師から経典伝承と口訣を受けた。また、この儀式は P.t.1002 にある通り「懺悔」と関係している。さらに儀式の記録を詳細にとりながらも、記録は袋とじにして秘密にしておき、儀式に参加した人々の名を明かさないようにしている。では、具体的にどのような儀式を想定し得るであろうか。

この儀式の内容について参考になると考えられるのが、菩薩戒戒品における出罪法の規定である<sup>(33)</sup>。船山徹氏によると、『梵網経』には重戒（波羅夷）を犯した場合の出罪法として、日に六度の決まった時期、仏像などの前で懺悔して十重四十八軽戒を誦え、仏の瑞祥を体験できるまで七日でも一年でも続けること、と規定している<sup>(34)</sup>。また船山氏は『菩薩地持経』の出罪法についても述べており、それによると菩薩が波羅夷を犯した場合、煩惱の程度によっては他の人間に向けて懺悔すると規定されているという<sup>(35)</sup>。

本リストから想定される儀式がそのまま『梵網経』や『菩薩地持経』の出罪法と一致するわけではないものの、波羅夷を断ち切ること、念誦すること、懺悔するという点において類似点が認められる。このように考えると、本リストの儀式も菩薩戒の出罪法と何らかの関係があるのかもしれない。

さらにこの儀式の詳細を知るためには、リストに列挙される各経典の内容をそれぞれ分析し、さらに考察する必要がある。しかし、この課題は現時点においては筆者の手にあまる。本稿ではまず問題を提起するにとどめ、御考を待つことにしたい。

### おわりに

本稿では、チベットで行われていた仏教が敦煌周辺へ流入した過程を探るという目的のもと、受戒の儀式に関わると考えられるチベット語文書を分析した。この儀式がチベット人によって主催されていたこと、参加する人々は法名をもった敦煌の漢人であったこと、彼らの念誦した経典名と頌数は秘密に記録されたことを確認した。

(32) 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌—チベット帝国期と帝国崩壊後—」坂尻彰宏（編）『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造の研究』（大阪大学、2017年）34頁。

(33) 以下、菩薩戒における出罪法については加納和雄氏（駒澤大学准教授）にご教示を受けた。記して謝したい。

(34) 船山徹『東アジア仏教の生活規則 梵網経：最古の形と発展の歴史』（臨川書店、2017年）477-478頁。

(35) 前掲書 478頁。

しかし残念ながらこの儀式の詳細については、筆者の力量不足により明らかにすることができなかった。諸賢のご教示を乞い願う次第である。また、紙幅の都合上リストのテキストならびに翻訳を掲載することができなかった。別稿にて公表したい。

### 略号表

Mvyut 榊亮三郎『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』全2巻、鈴木学術財団、1916年。  
P.t. Pelliot tibétain

### 参考文献

- Jäschke, Heinrich August. *A Tibetan-English Dictionary*, London, 1881.
- Lalou, Marcelle. *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang : conservés à la Bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)*, 3 vols., Paris : Librairie d'Amérique et d'Orient, 1939-61.
- Takeuchi Tsuguhito. *Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Daizo Shuppan, 1995.
- Uray Géza. The Title dbang po in Early Tibetan Records. P. Daffinà (ed.), *Indo-Sino-Tibetica: Studi in Onore di Luciano Petech*, Rome : Bardi Editore, 1990. 419-433.
- 船山徹『東アジア仏教の生活規則 梵網経：最古の形と発展の歴史』臨川書店、2017年。
- 岩尾一史「チベット仏教文化と敦煌—チベット帝国期と帝国崩壊後—」坂尻彰宏（編）『出土文字資料と現地調査による河西回廊オアシス地域の歴史的構造の研究』（平成25年度~平成27年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号25370831）大阪大学、25-36頁、2017年。
- 陸離「敦煌吐蕃文書中の“色通（Se tong）”考」『敦煌研究』2012-2、66-72頁、2012年。
- 森安孝夫「ウイグルと敦煌」『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、299-335頁、2015年。
- 高田時雄「吐蕃期敦煌有關受戒的藏文資料」高田時雄（著）鐘翀（訳）『敦煌・民族・語言』中華書局、140-155頁、2005年。
- 沖本克己「律文献」山口瑞鳳（編）『講座敦煌6 敦煌胡語文献』大東出版社、395-418頁、1985年。
- 上山大峻『増補 敦煌佛教の研究』法蔵館、2012年。
- 山口瑞鳳「吐蕃支配時代」榎一雄（編）『講座敦煌2 敦煌の歴史』大東出版社、195-232頁、1980年。
- 張怡蓀『藏漢大辞典』民族出版社、1993年。
- 中国国家図書館（編）任継愈（主編）『国家図書館蔵敦煌遺書』第112冊、北京図書館出版社、2011年。

[本稿は JSPS 科研費 JP17H02401、JP18H00723 の助成を受けたものである]

